

一郎さんは、国語の授業で【Ⅰ】の古典の文章を読みました。
後の問1～問5の問いに答えなさい。

【Ⅰ】古典の文章

ある遁世とんせいの上人しやうにんの、学生がくしやうなるが庵室あんじつへ、修行者しゆぎやう常きたに来る。中にあ
(世を離れた学僧の上人の部屋に)

る修行者しゆぎやうの云いはく、「法師ほふしは生まれてより後、すべて腹を立て候さいぐわいはぬ」

(一切、怒ったことがあります)

と云ふを、上人ぼんぶの云はく、「凡夫ぼんぶは、^{※1}貪瞋痴とんじんちの三毒を具ぐせり。たとひ^①

(人は「貪瞋痴」というものを備えている)

浅深厚薄せんしんこうはくこそあれ、いかでか腹立ち給たまはざらむ。縁えんにあはぬ時こそ立たね、

(お怒りにならないことはないでしょう)

(怒る機会に出会わなければ腹は立たないが、さもないければ腹は立つもの)

また立つを覚え給おぼはぬか。^{※2}聖人せいじんにておはしますば、^②さもあるべし。

(聖人でいらつしやれば)

凡夫ぼんぶながらかく宣のたまふ、虚事そしじと覚ゆるなり」と云へば、「立たぬと云はば、

(嘘だと思われる)

(私が怒らないと言うのなら、

立たぬにておはしませかし。人ひとを虚事そしじの者になし給ふは、

怒らないとお思いになっておけばよいじゃないですか)

いかにとて候ふぞ」と、顔を赤めて、首をねちて叱しかりければ、「さては、

(どのようなお考えか)

さこそは」とてやみけり。嗚呼をこがましく侍はんべり。凡夫の習ひ、我が非③は

(と、けりをつけた)(愚かなやりとりです)(人の常として)

覚えぬとこそ。無言聖むごんひじりに似たり。

※1 貪瞋痴むさぼ貪りと怒りと無知。

※2 聖人知徳が最も優れ、万人が仰ぎ崇拜する人。

問1 上人・修行者・法師・凡夫・人の中で、異なる人物を指す

言葉を一つ選んで、その記号を書きなさい。

問2 たとひを現代仮名遣いに直して、すべて平仮名で書きなさい。

問3 さもあるべしの内容として最も適切なものを、次のア～エの中

から一つ選んで、その記号を書きなさい。

ア 普通の人の「貪瞋痴」に対して腹を立てても不思議はない。

イ 生まれてから一度も怒ったことがなくても不思議はない。

ウ 決して怒らないと人から誤解されていても不思議はない。

エ 腹を立てたことを全部覚えていたとしても不思議はない。

問4 ③ 我が非 の具体的内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

- ア 上人について、いつも他人の嫌がる批判をしてしまうこと。
イ 上人について、結論を出さずに話をうやむやにしていること。
ウ 修行者について、自分の発言と行動が一致していないこと。
エ 修行者について、他人の助言を安易に行動に移してしまうこと。

問5 一郎さんは、【Ⅰ】とテーマが似ている話「無言上人の事」を見つ
け、【Ⅱ】のように、あらすじと感想をノートにまとめた。しかし、
感想を読み返した際に、昔の人の笑いの感覚は、今の人の笑いの
感覚に似ているように笑っている の箇所の表現が適切ではないと
思い、書き直すことにした。「ことが分かった。」につながるように、
――部の言葉を使い、十五字以上、二十字以内で書きなさい。（句読
点を含む。）

【Ⅱ】一郎さんのノートの一部

〈「無言上人の事」のあらすじ〉

四人の上人（僧）が道場内での七日間の無言修行（物を言わずに、精神を統一する修行）を行った。

お手伝いの法師のみが道場への出入りを行った。

道場内の灯火が消えようとしていたので、ある僧が、お手伝いの法師に呼びかけた。

ほかの僧が「無言修行の場で、声を出していいわけがありません。」と言った。

二人の言葉を聞いた僧は、「みなさんは、この場ですべきことを分かっていますか。」と言った。

それを聞いた上の位の老僧が、「私だけは、物を言わない。」と言って、うなずいた。

〈感想〉

・ 難しい話だったけど、繰り返し読んだら理解できたので、うれしかった。

・ 昔の人の笑いの感覚は、今の人の笑いの感覚に似ているように笑っていることが分かった。

・ 興味をもって調べることは大切だと思った。

ことが分かった。

	問 5	問 4	問 3	問 2	問 1

問 1	(ア)	
問 2	(たとい)	
問 3	(イ)	
問 4	(ウ)	
問 5	(例)昔の人と、今の人の笑いの感覚は似ていることが分かった。	

〈備考〉
問 5

- (1) 要件について
- ・ 十五字以上、二十字以内で書いていないものは誤答とする。
- (2) 内容について
- ・ 同意文で、「ことが分かった。」に適切に続くように書いてあるものは可とする。
 - ・ 部分点は与えない。
- (3) 表記について
- ・ 誤字・脱字については、いくつあっても二点減点。

問2 「ひ」を「い」に直す。

〈歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直すときのきまり〉

・語頭と助詞以外の『はひふへほ』は、『わいうえお』に直す。

(例 あはれ…あわれ おもふ…おもう)

問3 「ある修行者」が、自分は生まれてから一切怒ったことがありま

せんと言ったことに対する上人の言葉である。「聖人」であれば、修行者が言うように、一切怒ったことがないというようなことがあるかもしれないが、「凡夫」でありながらそのように言うのはうそだと思われる。と、上人は述べている。

問4 **ポイント** この文章の面白さは、「生まれてより後、すべて腹を立て候はぬ(生まれてから一切、怒ったことはありません)」という修行

者が、それに対して「虚事と覚ゆるなり(嘘だと思われる)」と上人に言われて怒っているところにある。この修行者の、言っていることと行動が一致しない様子を「我が非は覚えぬ」と表現しているのである。